HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	生体反應側よりみた尿中生機物質の消長について：第14報 尿量と尿放置沃度酸値(K1)の相關について
Author(s)	岩田, 教榮; 中山, 雄二
Description	
Citation	結核の研究, 1, 94-95
Issue Date	1954-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26549
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_P94-95.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

生体反應側よりみた尿中生機物質の消長について

第14報　尿量と尿放置沃度酸価 (K_1)* の相關について

岩田敎榮・中山雄二
(北海道大学結核研究所化学部門)

疲労の研究を特殊の方向(代謝の異常)に求めていたのでは何時までたつてもらちがあかぬ。なぜならばその代謝の異常も個体の環境に対する適応のあらわれにすぎないからである。

疲労は個体の Acidosis の方向にあるものでもなく，また Alkalosis の方向にあるものでもない。常に両者に並存するものである。

われわれは今のところ疲労を表示する何物をももつていない。Acidosis も Alkalosis もすべて個体のその原因にすぎない。

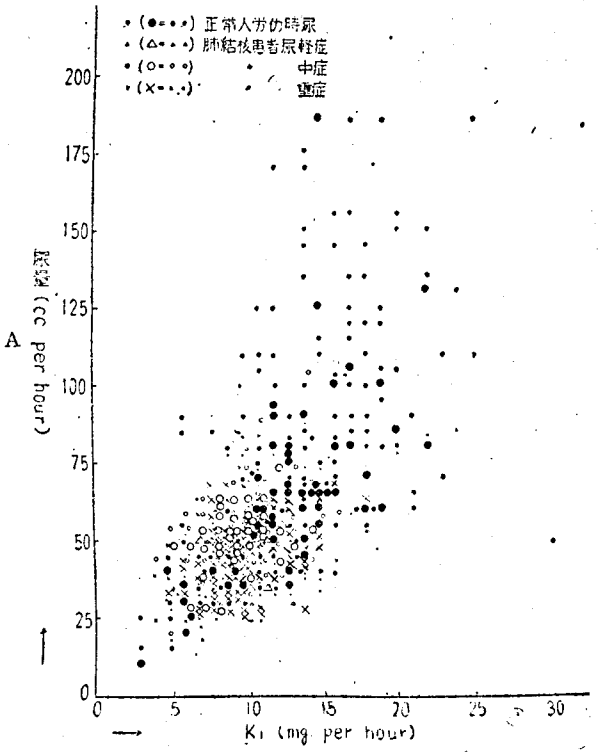
今回は尿量と尿放置沃度酸価 (K_1) の相関について報告する。

實驗條件並びに成績

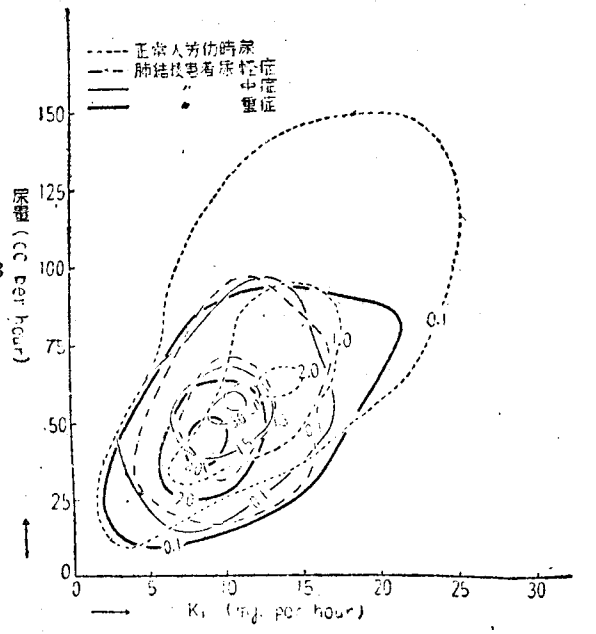
採尿は正常人労働者勤務時尿[1] (40余名，●印)。肺結核患者全日尿 (29名，×印……重症，○印……中等症および△印……軽症) について行い，採尿条件は前報[1-10]と全く同一であり，尿量，尿放置沃度酸価[11]とも1時間値をもつて表示した。尿量は cc. per hour. K^1 は mg per hour.

図Aはその原図であり，図Bはそれを over lapping mean 法により統計をとつたものである。即ち各 mesh の点にそれを囲む8個の mesh 中の点を加え，その総和の平均を求め，それより全数に対する%を計算し，等頻度曲線を各症例別に求めたものである。各等頻度%は図B掲載の数値に10を乗したものである。

図において　1) 正常人の重心点ともみられるところ



第 1 図



第 2 図

は尿量において約70cc となり比較的大きな数値を呈するが，これは勤務時尿を採集したためであろう。 2) 結核症のそれは重症でさえ 40-50 cc (全日尿を 24 で除し1時間値を求めた) であり正常とあまり変りがなかつた。 このように結核にかかり重症になつても尿量にあまり変化のないものは生体反応側よりみて誠に興味あるかつ貴重な事実である。 3) 結核症特に重症のものが正常人 (労仂時尿) に比し尿量，尿放置沃度酸値 (K_1) ともに減少の傾向をみせかつその両者の減少の割合がほぼ同じであることは尿排出と K_1-反応物質との間に K_2 のそれに比しより強い相関の存するを思わせて興味あるものがある。詳しいことについては他の期会に一括して報告するつもりである。

北海道大学山田内科並ひに国立札幌療養所の御協力に深謝する。なお本研究の1部は文部省科学研究費 (27年度) による，ここに謝意を表する。

文　献

1) 岩田教榮・齋藤辰次： 醫學と生物學, **26** (1): 1–4, 昭 28.
2) 岩田教榮・齋藤辰次： 醫學と生物學, **25** (4): 173–176, 昭 27.
3) 西風脩・佐々木裕雄： 醫學と生物學, **25** (4): 176–179, 昭 27.
4) 野崎德治・中山雄二： 醫學と生物學, **25** (4): 189–192, 昭 27.
5) 平池正・中川善治： 醫學と生物學, **25** (4): 199–202, 昭 27.
6) 西風脩・佐々木裕雄： 醫學と生物學, **26** (1): 4–7, 昭 28.
7) 中山雄二・野崎德治・平池正： 醫學と生物學, **26** (3): 94–97, 昭 28.
8) 岩田教榮・西風脩： 醫學と生物學, **26** (5): 192–196, 昭 28.
9) 齋藤辰次・中川善治： 醫學と生物學, **27** (3): 99–101, 昭 28.
10) 平池正・佐々木裕雄： 醫學と生物學, **27** (3): 102–104, 昭 28.
11) 西風脩： 醫學と生物學, **25** (1): 1–3, 昭 27.

(受付；昭和 28 年 3 月 16 日)
* 本論文は醫學と生物學第28卷第2號に發表した。